

中野幸

江蘇工業學院圖書館藏章

源氏物語の享受資料

調査と発掘

武蔵野書院刊

著者略歴

出身 昭和7年5月 神奈川県生
現職 早稲田大学教授 文学博士
編著書 うつほ物語の研究 うつほ物語資料
物語文学論攷 源氏物語古註釈叢刊
源氏物語資料影印集成12巻
奈良絵本絵巻集12巻別巻3巻
常用源氏物語要覧 源氏物語みちしるべ など
現住所 神奈川県逗子市逗子4-3-29

著者の
検
略印者

平成九年十二月二十日 初版発行

源氏物語の享受資料——調査と発掘——

定価…本体一三五九二円十税

著者 中野 幸一

東京都千代田区神田錦町三ノ十一
発行者 前田 昭

東京都千代田区神田神保町一ノ四九
印刷者 柿崎 忠一郎

東京都千代田区神田錦町三ノ十一
発行所 金社 武蔵野書院

電話 東京(329) 四八五〇・四八五九
振替口座 〇〇一九〇三六七一四六
郵便番号 一〇一

大文社印刷

4-8386-0175-1 C3091

目 次

I 中世資料

一 猪苗代兼載筆『源氏一部拔書』……………	5
二 細川幽斎筆『一葉抄』『檳柱』の卷……………	41
三 中院通勝筆『源氏物語絵詞』……………	57
四 伝高倉範音筆『源氏拔書并歌口傳』……………	71
五 異本『雲がくれ』……………	91
六 白描『源氏物語絵卷』……………	115

II 近世資料

一 橘守部筆稿本『源語類聚鈔』……………	157
二 福田美楯筆『玉廼小櫛』……………	179
三 藤原明恒著『源氏薰香考』……………	207

III 享受資料解題と目録

四	井上好春著『源氏雨夜立聞』……………	225
---	--------------------	-----

五	近世初期写『源氏物語抄』……………	233
---	-------------------	-----

六	成島筑山自筆稿本『紫史吟評』……………	257
---	---------------------	-----

七	『源語畧説』……………	291
---	-------------	-----

八	「源氏十二月詞」「源氏長歌」その他……………	305
---	------------------------	-----

九	源氏物語の袖珍本……………	331
---	---------------	-----

十	住吉如慶画『源氏物語扇面画帖』……………	341
---	----------------------	-----

十一	土佐光成画『源氏物語若菜卷絵巻』……………	353
----	-----------------------	-----

一	近世出版の『源氏物語』の享受資料……………	365
---	-----------------------	-----

二	源氏流生花書解題……………	415
---	---------------	-----

三	錦絵「源氏絵」総目録……………	423
---	-----------------	-----

四	「源氏双六」「源氏絵合」「源氏かるた」解題……………	487
---	----------------------------	-----

あとがき……………	501
-----------	-----

I
中世資料

一 猪苗代兼載筆『源氏一部抜書』

一

本書は、縦二四・八センチ、横一六・四センチの、やや細長の半紙本列帖装五冊。表紙は鶯茶地に金茶で梅折枝・牡丹折枝・七曜・重菱・蝶等を織り出した緞子。見返しは金銀切箔。題簽・外題はなく、題簽の貼付の痕跡も見えないが、この装幀は原装と思われる。

内題は、第一冊の冒頭に「源氏一部并次第」とあり、第五冊末に「源氏一部抜書」と尾題がある（写真参照）。本分料紙は厚手の楮紙で、各冊の丁数は、

第一冊	三綴	五十丁	遊紙一丁	墨付四十九丁
第二冊	四綴	四十丁	遊紙二丁	墨付三十八丁
第三冊	三綴	五十五丁	遊紙一丁	墨付五十四丁
第四冊	四綴	六十四丁	遊紙二丁	墨付六十三丁
第五冊	四綴	六十八丁	遊紙二丁	墨付六十六丁

となっている。

一面八行書き、一行の字詰は約二十〜二十三字前後。和歌は上下句二行書きで、第一・二冊は上句は本文よりほぼ

二字下げ、下句は三字下げに、また第三・四・五冊は、上句はほぼ三字下げ、下句は四字下げに書く。

各冊の収載範囲は、

第一冊 桐壺く葵

第二冊 賢木く絵合

第三冊 松風く真木柱

第四冊 梅枝く竹河

第五冊 橋姫く夢浮橋

となっているが、第四冊の末尾に「源氏のふみのしな／＼」とした二丁半ほどの文章があり、第五冊の末にも「夢のうきはしと申は……」以下四丁ほどの文章がある。

本書の筆者については、第一冊の見返しに、

「猪苗代法橋兼載 源氏拔書全部 五冊

山琴」

と記した極札が貼付されており（写真参照）、本書を納めた古い桐箱の蓋上右寄りにも、

「源氏拔書 五冊 猪苗代法橋兼載筆」

とある。また、本書と共に伝わる「極札 了音／代付 了仲」と二行に上書きした奉書紙の中には、

「源氏拔書 五冊／一兼載法師／金子五枚」と記された紙片が入っている。これらのことから本書は、猪苗代兼載筆の「源氏拔書」とされているものであることが知られる。本書を兼載筆とすることについては、時代・書風共に十分首肯しうるもので、他の兼載筆の諸資料と比較しても、信じてよいと思われる。なお、箱の蓋上や極札に「源氏拔書」とあるのは、おそらく正式な書名ではないであろう。本稿では、本書の書名を便宜上第五冊末の尾題によって、「源氏一部拔書」と称しておく。

なお、本書には全巻に亘って朱の合点・圈点・書き入れ・校合が見られる。合点は巻や段落の初めの部分に付されており、圈点は和歌や寄合の語句の頭につけられている。書き入れは和歌の肩にその詠者を記したり、漢字にルビを加えたり、また寄合の語句について注すべきことをその傍らに記している。校合は専ら和歌について他本との違いを「イ」として傍書している。この朱筆は古いものらしく、小字ながら本文の筆跡に酷似しているので、あるいは兼載自らの書き入れであるかも知れない。

二

猪苗代兼載（二四五二—一五一〇）の伝記については、金子金治郎氏『連歌師兼載伝考』（昭和三十七年、桜楓社刊）に詳しいが、それによれば、『源氏物語』関係では、明応六年十一月に行われた実隆邸での源氏物語論談に参会したり、永正二年十二月に「独吟源氏国名百韻」を詠んだり、翌三年五月に「源氏物語の三ヶ大事」を顕天に口伝したりしたことが知られる。また、大津有一氏の「注釈書解題」（『源氏物語事典』下巻）によれば、内閣文庫本『源氏供養表白』や龍門文庫本『源氏物語』の一部を書写していることが知られるが、まとまった『源氏物語』の注釈書を著わしたり写したりしたことは見えない。

しかしながら、兼載の『源氏物語』の注釈書については、江戸時代中期の国学者藤井貞幹の『国朝書目』（寛政三年刊）巻之下に「源氏物語鈔 兼載 五巻」と見えており、五巻から成る注釈書が存在したことを伝えている。また松井簡治氏の「源氏に於ける古代の註釈及び研究」（『国語と国文学』第二巻十号、源氏物語号、大正十四年十月）にも、「全部に涉つて註釈したもの」として「源氏物語抄 五巻 猪苗代兼載」とあるが、これは『国朝書目』からの引用か解説者の実見によるものか明らかでない。その後、藤田徳太郎氏『源氏物語研究書目要覧』（六文館、昭和七年刊）には「源氏物語抄 五巻 猪苗代兼載（伝本不明）」とあり、武笠三氏『源氏物語書史』（平原社、昭和九年刊）にも「源氏物語抄

写本 五巻 同人作 本書は源氏物語の全部に亘って註釈を施したものの（松井簡治稿）と見えるが、これらはいずれも前掲の松井氏の稿からの引用で、原本には接していない。ことに藤田氏が「伝本不明」と記しているところから見ると、この時期、すなわち昭和七年当時、すでに原本の所在が分からなくなっていたわけである。

『国朝書目』の記載が何によったものか明らかでないが、書名の頭部に「記者今所加」の印として△印がつけられているので、貞幹自身はこの書の伝存を承知していたと思われる。しかし寛文十一年刊の『本朝書籍目録』をはじめ、享和元年刊の『群書一覽』、文化八年刊の『近代名家著述目録』、文化九年刊の『掌中群書一覽』等々の江戸時代の書籍目録の類にはこの書名を見いだすことができないので、広く知られてはいなかったものと思われる。

この兼載自筆の『源氏一部抜書』五冊を、『国朝書目』の「源氏物語鈔」と同じと見なすとき、いささか気になるのは書名の異なりであろう。しかし「源氏物語抄」とか「源氏物語聞書」などの書名は、『源氏』の注釈書によく用いられる呼名であるし、本書の書名も実は「源氏一部并次第」（内題）「源氏一部抜書」（尾題）「源氏抜書」（極札・箱墨書）と一定ではなく、題簽もないので、本書を「源氏物語抄」と呼称することもありうると思われる。また兼載に、本書のほかに五冊本の『源氏物語』に関する著述があったとは考えにくいであろう。前掲の松井簡治氏の古注釈書の解題に「全部に涉って註釈したもの」とあるのは、おそらく書名と巻数からの推量で、原本に接していない故の誤まりと考えられる。

以上のことから、『国朝書目』以来諸書に伝える兼載の「源氏物語抄（鈔）」とは、本書そのものではないかと考えられる。とすると、本書は、昭和初期、あるいはそれ以前から伝本不明とされていた兼載自筆本が、少なくとも半世紀以上を経て忽然と現われたわけで、まさに刮目に値することであろう。かつて伊井春樹氏が兼載の源氏注釈書に触れて、「今日存在すれば、兼載の唯一の全巻にわたる源氏研究書として貴重な存在になるはずである」（『光源氏歌抄出』愛媛大学古典叢刊7 解題）と言われたが、他ならぬその兼載自筆本がここに出現したということである。

三

本書の内容は、「源氏一部抜書」の書名が示すように、「源氏物語」全巻に互って和歌を中心に抜き書きしたものである。その著作意図は第五冊の末に、

連哥のためなれはところ／＼つし／＼をとり侍りされはふしんおほかるへし／＼

とあって、連歌を作る時の参考に著わしたものであることが知られる。抜き書きは和歌と物語本文とから成るが、本文は物語本文そのままの抜抄ではなく、適当に簡略化梗概化しており、物語のかなり長い部分を簡約しているために結果として物語の内容展開に必ずしも忠実でない部分も生じている。しかし和歌は物語中のほとんどすべてについてそのまま掲出しており、物語のどのような場面で誰によって詠まれたかを容易に知りうるようになっていいる。歌数は七五四首で「源氏」の総歌数七九五首よりも四一首少ない。その各冊ごとの収載歌数は次のようになっている。

(源氏物語歌数) (本書歌数)

第一冊	桐壺／＼葵	一三二	一三三
第二冊	賢木／＼絵合	一五〇	一〇八
第三冊	松風／＼真木柱	一四五	一四五
第四冊	梅枝／＼竹河	一九一	一九一
第五冊	橋姫／＼夢浮橋	一七七	一七七
計		七九五	七五四

右に示した如く、本書は「源氏物語」の和歌をすべて取りこむことを旨としているらしいが、本書第二冊の「賢木」の「絵合」の部分の歌がどういいうわけか少なくなっている。なお第一冊の歌数が本書の方が一首多いのは「夕顔」の巻

の引歌を一首取りこんでいるからである。また第五冊は結果的には歌数は変わらないが、本書は「総角」の巻の末にあるべき「行く末を」の歌を脱しており、「手習」の巻の引歌を一首とりこんでいる。

本書第二冊の歌数だけがなぜ少ないのか明らかでないが、さらにその巻別の収載歌数を示すと次のようになってい

	(源氏物語の歌数)	(本書の歌数)	(減数)
賢木	三三	一四	一九
花散里	四	二	二
須磨	四八	四二	六
明石	三〇	二八	二
濡標	一七	一〇	七
蓬生	六	三	三
関屋	三	〇	三
絵合	九	九	〇
計	一五〇	一〇八	四二

右のように、本書第二冊の歌数は「賢木」から「関屋」までの各巻において軒並み減じている。第二冊の巻々の歌数が他に比して特に多いというわけでもないのに、抜き書きの方針に何らかの変更があったと考えるほかはないが、それも「絵合」に至ってまた全歌を収載しているもので説明に窮する。この第二冊のみに見られる奇妙な現象については、残念ながらここでは指摘するにとどめておく。

本書の大きな特色は、連歌の寄合の参考となるべき語句を物語中から抜き出して、各巻の初めに列挙していること

である。これは「連哥のためなれは」という主旨に依るものであることは言うまでもないが、注目すべきはその寄合の語句が他の類書よりもはるかに多く、しかも他書と重ならないものが少なくないことである。

以上のような、物語の簡略な梗概と物語歌と寄合の語句とから成る形態の著作は、『源氏小鏡』『源氏抄』などの類と似ているが、それらがせいぜい一一〇首から一三〇首程度の歌を載せているのに対し、本書は『源氏』中のほとんどの歌を収載している点で、どの『小鏡』の類とも異なるものであり、また連歌の寄合の語句を掲出している点で、『源氏物語歌集』『源氏物語和歌抄出』『源氏大鏡』などの類とも相違していると言えよう。

四

本書の梗概部分はきわめて簡略で、そのために本来の物語の展開を無理に圧縮したり、故意に歪曲したりしているところも少なくない。それにも拘らず、かなり自由な考説や特有の解釈も含まれていて興味深い。

例えば「桐壺」の巻の源氏十二歳の元服のことを述べた条は、次のように記している。

春宮御くらむにつかせ給てのち光けんしは七の御としふみはしめさせ給てかくもむのみちかしこきことふみならひなし十二の御とし御けんふくこれはしうのふむわうの子ふわうの子せいわう十二にてえうこうたむのとりたてにてけんふくせさせ給けるそのれひにまかせて御しうとはひきいれの大^{（み）}臣殿なりけんふくの御いはるの時大しんとのをめして思ひさしせさせ給ひ

いけとなきはつもとゆひになかの世をちきるこゝろはむすひこめつや

右によれば、源氏が十二歳で元服し舅の左大臣が引入れ役をしたのは、周の武王の子成王が周公旦の尽力によって十二歳で元服したことを先例としているという。このような準拠説は『河海抄』以下の古注釈書にも見えないもので、本書特有の解釈と思われる。

また、本書巻本には「夢の浮橋」の意味について、

夢のうきはしと申は生死喜愁せんあくひんとく花もみちかくのことくものくにしたかひてうつりかはれるむくひのあるよの中をまよひの人にしらせむとて先哥のまちよりひき入へきはうへむをもつてほんふさいとのほとけひかるけんしとあらはれ給ふにや

と述べ、続いていわゆる「源氏のおこり」については、

……しきふいし山のくわんおんにまいりて一七かこの事をきせひ申けるそのしるしにや湖水のなみのうへに六十のまきならひのしたひのころこと葉のうかひたりけるを見およびてかき侍るとかやさいかくはさこそありけめをんなの身にてりしやうなくてはいかにしてかやうにはつくり侍るへき

と、諸注釈書に見える石山伝説とは少し異なつた内容を伝えている。

さらに『源氏物語』の主旨については、

されはしきしまのみにこゝろをかくるをんなのけんしにのそみをかけぬ物あるへからす無智なる人をもかやうのみちよりみちひきてつるにふたらくしやうとへむかへとらせ給ふへき御方便とおほゆる

と、和歌の道から仏道へと導く方便であると説いており、源氏六十巻説にも言及して、

このまきはてんたい六十巻よりかきいたし侍るなりともいふそのゆへは普門の二字をうかゝひみるにてむたいはもんなりけんしは普也

と普門の二字について天台は門、『源氏』は普であるとし、『源氏』の女性たちの生きざまに言い及んで、物語の主旨は現実の空しさを知らしめるためと説いている。

このまきをしつかに見るにいろをこのみにほひにふけるなん女みなの中にしゆ下せき上にさまかへほんなうのきつなをきりてねはんの舟のともつなをもとめてつるには彼きしのりにいたりぬしかれは一しやうかいのたは

ふれうゐむしやうはたゝ春秋の夢としらせむために夢のうきはしとかきとゝめ給ふ

『源氏物語』を悟道の導きとみなす説は本書のみではないが、

されは朝夕この巻をしんしてよむ人をは一日に七度まもらむとくわんおんの御ちかひありかたく侍れはつねにこれをみさせ給はむ人ゝはくわんおんのみやうかうをとなへて一すひの夢をよくさませ給ふへし

と観音信仰に強く結びつけているところは、若くして仏門に入り興俊の法名をもつ兼載ならではの考説というべきであらうか。

次に物語の内容と本書の叙述とが若干違っている例をあげておく。

「帚木」の巻で源氏が空蟬と逢う場面は、本書では次のように記している。

源氏の中将中かみの御かたかへは中川のいよのすけかしゆく所なり伊よへくたりてそのやともしには子のきのすけはかりそありけるいよのすけかねうはうもおなくやとにそ侍りけるひとまなるところに御ましのへてふし給ふものこしにあるしの女のきぬのをとなひのしけるを御みゝにとめて夜ふけ人しつまりてその夜しもつまとのかけかねをわすれかけさりけるうちへしのひいらせ給ふあるしの女をいたきてわかおましへかへり給ふをしゝうかなくりとめけれともかなはすあるしの女はおにゝとられたる心ちしてあせみつになり夜もすからさらにものをいはずひとへにしにたるものゝことくにすかし給へとも返事にもおよはず鳥のなきければ

つれなさをうらみもはてぬしのゝめにとりあへぬまでにおとろかすらん

右の叙述に従えば、中川の紀伊守の邸は伊予介の宿所で、その宿守が子の紀伊介ということになっている。また、源氏が空蟬を抱いて出て来た時に出会った女房は、中将の君であるのにここでは侍従となっているし、源氏と逢っている空蟬の状態を「鬼に取られたる心地して汗水になり、夜もすがらさらに物をも言はず、ひとへに死にたるもの」如くにて、すかし給へども返事にも及ばず」と記すのも、物語本文に即した叙述とはいいい難いであらう。